

2024

令和6年11月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻375号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあそび



公益財団法人



公益財団法人
さわやか福祉財団

すべての人が幸せに暮らせる社会へ



いきがい・助け合い オンラインフェスタ2024

目指せ 地域共生社会

\\ ごちゃまぜにつながろう! //

たくさんのご参加ありがとうございました

10月15日から24日まで、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」を開催しました。

いきがいを持ち、支え合う地域共生社会の実現に向けて、「オープニングフォーラム」「特別トーク」「学ぼう編」「語ろう編」のプログラムを配信し、パネリストの方々からたくさんの実践報告や提言をいただくことができました。

アーカイブ配信は11月30日(土)までご視聴いただけます。

参加者の皆様はどうぞご活用ください!

※本文2～8ページの記事もご覧ください。



最終日10月24日の配信、語ろう編「つながりづくりの進め方 地域共生社会づくりに向けたごちゃまぜの『つなげ方・つながり方』とは」も無事終了

とあ言おう

2024年11月号

CONTENTS

2 **新しいふれあい社会 実現への道**

失敗と体験から得られるもの

清水 肇子

4 **速報** いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024

9 **広げよう つなげよう 地域助け合い** 活動の現場から

みんなで楽しく、あたたかく 地域を守る高層団地の活動

リビングほしがおか（大阪府岸和田市）

16 **いきいき わくわく** 子どもと一緒に地域で輝こう

子どもたちがつくる児童館 希望のひかり「らいつ」

石巻市子どもセンターらいつ（宮城県石巻市）

26 **連載** 共生社会 ー 認知症との新しい向き合い方 7

認知症の症状と、認知症の人の世界を理解する ーその2ー

社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

28 **連載** 人生100年 地域とつながる施設とは 7

日本の幸福度ランキング

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

新しいふれあい社会づくりに向けて

22 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

32 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

33 活動日記（抄）

㊦財団ツール紹介

㊦みんなの広場 / 投稿募集

㊦さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・辻村 哲夫

失敗と体験から得られるもの

「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」を終えて
ご参加ありがとうございました

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

何か失敗する権利を奪われるんですよ。失敗すると怒られるんですよ。

でも皆さんだって失敗しているじゃないですか。

失敗するから工夫をするんですよ。

工夫をするから成功体験が生まれるんですよ。

成功体験が生まれるから元気になるんですよ。

失敗していいんですよ。

成功体験に結びつけることが大切だと思います。

去る10月15日（火）～10月24日（木）まで約2週間にわたって、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」を開催した。これまでお伝えのとおり、今回のフェスタは、「目指せ地域共生社会 ごちゃまぜにつながろう！」を副題としている。ごちゃまぜという言葉は、

元々以前から地域活動の現場では使われてきているが、高齢・障がい・子ども・生活困窮といった4分野の連携だけでなく、〃世代も様々な分野も超えて、地域の皆で考え、つながっていい〃という趣旨を込めている。共生が求められるこれからの時代、多様なつながりを進め、改めてその価値や意味をpushしながら、住民・市民が主体的に参加しいきいきと取り組んでいく地域づくりに向けて、皆で学び合っていこうというもの。

お陰様で今年も全国から大変多くの皆様にご参加いただいた。昨年が続いて各分野を代表する識者の方々や意欲的に素晴らしい取り組みを実践している地域づくり関係者の方々にご協力をいただき、実りあるプログラムとすることができた。改めて御礼申し上げます。

さて、冒頭の言葉は何かといえ、フェスタ初日に配信したオープニングフォーラムで、登壇者の丹野智文さんが発言されたものだ。若くしてアルツハイマー型認知症と診断された丹野さん。しかし、家族や職場、周囲の理解を得て、引き続き企業に在職しながら、一般社団法人認知症当事者ネットワークみやぎ代表理事としても活躍している。さらに認知症当事者のための忘れ総合相談窓口「おれんじドア」も開設するなどして、全国で認知症の社会的理解を広める活動に尽力されている。ご存じの方も多いだろう。

丹野さんのこの言葉、読者の皆さんはどう受け止めるだろうか。認知症の人への理解はもとより、私たちが皆で取り組んでいる地域づくりにも大いに通じるところがある。まずはやってみよう。地域づくりには唯一の正解などないのだから。批判や失敗を恐れて足踏みをしていては何も変わらないし、楽しくもない。失敗しても体験することが次への大きな学びになり、エネルギーになる。フェスタがそんな一歩を踏み出すきっかけになってくれれば本当にうれしい。

いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024

目指せ 地域共生社会 ぐちやませにつなごう！

10月15日（火）～24日（木）の土日を除く8日間にわたり、当財団主催「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」を開催しました。今月号では、「オープニングフォーラム」、学ぼう編の「認知症の人と共に生きる地域をどうつくるか」「子どもの育ちを地域で応援しよう」を中心に速報でお伝えします。

（文責・編集部）

オープニングフォーラム

「地域共生社会をみんなでつくるための提言」

進行役

登壇者

宮本 太郎氏
村木 厚子氏
西 智弘氏

中央大学法学部教授

社会福祉法人全国社会福祉協議会会長

川崎市立井田病院腫瘍内科部長

一般社団法人プラスケア代表理事

丹野 智文氏

一般社団法人認知症当事者ネットワークみやぎ代表理事

熊谷 美和子氏

NPO法人たすけあい平田理事長

宮本氏は冒頭、「『地域共生社会』とは『誰も取り残されることなく支える側にも支えられる側にもなり、そ

して縦割りを越えた支援と助け合い・支え合いで誰もが元気になれる社会』だろうと思う。では「元気」とは何かだろうか。誰もを元気にする助け合い・支え合いのため具体的に何をすればよいのか」と提起。誰もが元気になれる地域をつくるための「つながる・つなぐ・場をつくる」ための方法を登壇者から紹介してもらい議論したい、と口火を切った。

西氏は、がんの専門家として治療に従事する中で、社会や友人と切り離され孤立している患者が多いことに悩み、秋山正子氏が始めた「暮らしの保健室」を神奈川県川崎市にもつくった。大きな病気を抱えても、患者本人が得意なことを生かせる場があることで外出し、役割と

友だちができ、笑顔になるという「社会的処方」の事例を報告。病気や障がい目に向け過ぎず、本人がどういう特性を持ち何に興味があり、どこつながれば元気になれるかを一緒に考え、あくまで「人」を中心に「場」やつながりを見つけることが大事、と語った。

丹野氏は、39歳のときにアルツハイマー型認知症の診断を受け不安と恐怖に襲われたが、同じ認知症の人との出会いを機に前向きになれた経験から、当事者が当事者の相談窓口となる「おれんじドア」の活動を立ち上げた。

「認知症には予防が大事だと言われるが、備えることが大事だと思う」と話し、置き忘れへの備えとして家の鍵や財布等をひもで鞆とつなぐといった仲間の工夫の例を挙げた。そして、「認知症の人の話をきちんと聞いて、何を望んでいるか、説得でなく納得する応援を」と訴えた。

村木氏は、今年6月に能登を訪れ、衣食住と同時に人のつながりをつくる取り組みがされており、それにより地域が全体として強くなること等を紹介した。また、自身が代表呼びかけ人である、少女や若い女性を支援している「若草プロジェクト」の活動を報告。相談の手前でおしゃべりできたり愚痴が言えたりする場をつくらう、

と話した。「『綱』を『網』にした。綱につかまっても力尽きることがある。多機関連携により網を作り、手を離してしまっても受け止めてもらえる。それが地域共生社会かなと思う」と語った。

熊谷氏は、自身が理事長として活動する島根県出雲市の「NPO法人たすけあい平田」について、「地域に住むもう一人の家族になろう」を合言葉に一人ひとりができるときにできることを有償で支え合っている活動を紹介。さわやかインストラクターとしても、生活支援体制整備事業に取り組んできたこと、島根県が設けた生活支援サービスのアドバイザー派遣制度で市町村の伴走支援を行っていること等を報告した。「地域が求める福祉はそれぞれ違うので、自分たちの地域に合った福祉を実現しよう」と語った。



各登壇者の発表を受けて宮本氏は、「『地域共生社会』についてだいたい具体的な見えてきた。次のステップも射程に入ってきたように思う」とオープニングフォーラムを締めくくった。

学ぼう編

「学ぼう編」は、「生活支援コーディネーターの任務と役割」「協議体の取り組み方」「共生型常設型居場所」「有償ボランティア」「近隣助け合い」「認知症の人と生きる地域」「シニアの社会参加」「子どもの育ち」の8テーマを設定し、テーマごとの基本の情報を発信した。

「認知症の人と共に生きる地域をどうつくるか」

進行役 堀田 聡子氏

慶應義塾大学大学院
健康マネジメント研究科教授

登壇者 紺野 敏昭氏

医療法人館 こんの神経内科・脳神経外科
クリニック理事長

稲葉 修氏

木工房「いつでもゆめを」店長

伊東 憲男氏

木工房「いつでもゆめを」従業員

阿部 かおり氏

NPO法人たすけ愛京築統括理事
福岡県若年性認知症サポートセンター長

冒頭、堀田氏が今年1月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」第一条などに触れ、「認知症は誰もがなり得るという前提の下、認知症の人も当たり前に社会参加できる地域について考えたい」と述べた。

稲葉氏は、認知症の人の仕事の場「いつでもゆめを」について説明。認知症の人も、経験があり体で覚えていることがあること、その日にやる仕事は指示されるのではなく本人が決めることが大切であることなどを話した。

従業員の伊東氏は、「いつでもゆめを」に通うようになったきっかけから、作業の難しさややりがいについて語り、「仕事は義務でやることではなく楽しむ」と話した。

さらに稲葉氏は、「認知症の人がそのままでも共に過ごす環境を創出する。それは人と人との関係が創り出すもので、システムや物理的のものではない」



と語った。

紺野氏は、認知症の人が主体的に買い物をする「スローストッピング」について発表。認知症サポーターが支援して当事者が買い物を楽しめる仕組みをつくったことや、地域にさまざまな協力が者が増えたこと、そして本人や家族の要望を取り入れて活動が広がっていることを報告した。「専門職だけで進めず、当事者の意見を仕組みに反映することが大事」と語った。

阿部氏は、自身がセンター長を務める福岡県若年性認知症サポーターセンターにおける「ピアサポーター事業」、当事者がデザインした「福岡県認知症カフェ」、市町村と学び合う「寄り添う伴走支援」「未払い行動」への理解促進活動について紹介。「認知症になってもならなくても、地域の中で支え合い助け合って生きていける地域になることが大切だと思う」と述べた。

* * *

堀田氏は最後に「皆さんも認知症の方も『こんなことをやりたいな』ということをまず一緒にやってみる、楽しむ。そこから輪が広がって、気がついたら安心して認知症になれる地域になればいいなと思う」とまとめた。

「子どもの育ちを地域で応援しよう」

進行役 奥山 千鶴子氏

NPO法人

子育てひろば全国連絡協議会理事長

認定NPO法人ひーのびーの理事長

登壇者 藤原 佳典氏

地方独立行政法人

東京都健康長寿医療センター研究所副所長

日本世代間交流学会副会長

NPO法人日本世代間交流協会副会長

佐藤 恵氏

子育てアラサークルたまふら代表

音楽隊代表

宇野 均恵氏

認定NPO法人

ハイモニーネット未来理事長

冒頭、奥山氏は「今年6月に子ども・子育て支援法が改正され、すべての子ども・子育て世代を対象とする支援の拡充がスタートした。しかし、制度だけでなく地域のつながりが重要であることを確認したい」と述べた。

佐藤氏は、移動式で市内の公共施設をまわる「たまふら」の活動と、地域とのつながりについて報告。活動する中での大変なことややりがいなども交えて、世代を問わずみんなでまちをつくるために「できる方法を考える」「行動してなんぼ」「目的を忘れない」「笑う門には福来る」の4つの想いを大切にしていると話した。

宇野氏は、「子どもにとって良い環境とは、今を生き



学ぼう編「子どもの育ちを地域で応援しよう」

るすべての人が安心して自分らしく生活できる地域社会だ」とし、活動を子どもから高齢者にまで広げてきたと報告。誰もが気軽に集う居場所から困り事を助け合う有償ボランティア活動等も紹介した。

藤原氏は、「ともあそびが生まれる「場」の力」をテーマに報告。多世代交流が生まれるような場が重要だが、現代社会で自然発生的につながることは難しいことから、シニアのボランティアによる子どもたちへの絵本の読み聞かせを推進しており、その中でボランティアの目が地域に向いてくる、と話した。また、京都市内の実家をNPO法人に提供し、化学反応の起こる居場所を推進していることなども報告した。

最後に奥山氏が、国が策定した「はじめの100か月
の育ちビジョン」について触れ、「妊娠期から小学1年
生頃までの100か月が充実していることが、その後の
その子の人生において非常に重要。親だけでなく社会全
体で関わってほしい」とメッセージを発信してプログラ
ムを締めくくった。

語ろう編

「生活支援コーディネーターと協議体はどう働きかけた
らよいか」「居場所と有償ボランティアをどう広げたら
よいか」「つながりづくりの進め方」の3プログラムを
ライブで配信。視聴している参加者へ事前にアンケート
を行い、それに答えたり、オンラインの投票機能を用い
て質問するなど双方での議論を行った。最後は「地域
共生社会をイメージする言葉」を進行役の清水肇子理事
長が問いかけ、「つながり」をはじめさまざまな思いの
言葉が画面に浮かび、プログラムの閉幕となった。

本誌12月号でも引き続き「いきがい・助け合いオンラインフェ
スタ2024」についてご報告します。また、次号「さあ、やろ
う」で本フェスタの詳細をご報告いたします。

エ
広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



みんなで楽しく、あたたかく 地域を守る高層団地の活動

リビングほしがおか（大阪府岸和田市）

「だんじり祭」で知られる岸和田の高層団地に誕生した住民グループ。高齢者から子どもまで皆を大事にし、必要な活動を次々と創出してきた「リビングほしがおか」取材しました。

（取材・文／境 朗子）

誰もが集える居場所が必要

玄関前にはオープン30分以上前から子どもたちが待っていた。「メガ特盛りのカレーがいいな」と言い合ったり、歌を口ずさんだり。聞けば、同じ

小学校の3年生から5年生が誘い合っていたのだそう。「ずいぶん早いじゃない。もう少しで開くからね」「はい」と、スタッフと言葉を交わす。子どもにとっては、こんな時間もカレーのおいしさを増すスパイスであるらしい。

岸和田市北西部に立つ高層団地、大阪府営荒木住宅（通称・星ヶ丘）の集会所



大阪府営荒木住宅。写真右中央の平屋が活動拠点の集会所



原口さん。「岸和田だんじり祭は、大人から幼い子どもまで全世代で綱を引きます。リビングほしがおかも同じです」



子どもたちもこのカレーが大好き

か」（以下、リビング）。メニューはカレーのみで、高校生以下は無料、大人は300円だ。準備万端整った頃、カレーの香りに惹かれて、子どもから高齢

者まで多い日は100人もの人たちで大にぎわいとなる。
星ヶ丘は1961年に戸建ての府営住宅として誕生し、97年、現在の高層団地に建て替えられた。総戸数は655戸、現在は570世帯が居住している。リビング代表の原口正彰さん（80歳）は建て替え前からの居住者だ。「入居当時は幼稚園バスが行き交っていました。でも現在はデイスービスの車が何台も送迎に来て、夜間は救急車のサイレンが鳴り響く町になっていきます」と話す。

少子高齢化は進む一方だった。そんな折、市社会福祉協議会から住民同士で支え合う小地域ネットワーク活動への参加の誘いがあった。民生児童委員を務めていた原口さんから問題意識を持つ星ヶ丘の住民たちはさっそく行動に移し、2002年、高齢者宅へのふれあい訪問をスタート。「一人暮らしで歩けない方は『部屋の

鍵が開いているから入ってきて』と私たちの訪問を心待ちにしてくださるようになりました。他愛ないお話で盛り上がります」と星ヶ丘の老人クラブ「なごみ会」の会長、山下昭子さん（77歳）は話す。一方で、玄関チャイムを鳴らしても人との接触を避ける住民も。孤立問題が深刻化していった。

「誰もが集える居場所の必要性を感じていたところ、08年、大阪府の福祉事業



なごみ会会長の



この日のカレー亭ボランティアの皆さん

山下さん

の一環で集会所を改修してふれあい喫茶を開設することになり、それをきっかけに『リビングほしがおか』を立ち上げました」と原口さん。以降、まちづくりとして多彩な取り組みを展開するようになった。現在、活動メンバーは60〜80代を中心に65名ほどで、カレー亭は17年に始めた。

「中学校の校長からも『家で十分な食事ができない子もいる。子ども食堂をやってもらえないか』と相談がありました。私たちも子ども食堂に関心を持っていたので、1か月ほどでオープンしました」とメンバーの麻生保さん。

引越してきた団地で友だちができた

子どもたちと楽しげにカレーを食べている40代の女性に話しかけてみた。聞けば4人の子のシングルマザーで、星ヶ丘に引越してきたのは3年前。以前暮らしていたまちでは近隣とのつ

きあいがないとなく、幼い子どもたちは疲れ気味の母親を気遣っていたようだ。「星ヶ丘の皆さんは親切でよくしてくださいます。知り合いがたくさんできたし、お裾分けもいただきます」と言うと、横から、女性の子どもで小学5年生の男の子が「スパゲティとかいろいろくれる」とうれしそうに教えてくれた。今年のだんじり祭では鉢巻きに法被姿で「綱を引いたよ」とちよつぱり誇らしげにスマホの写真を取り出す。母親は「サッカーのお友だちも一緒に遊んでくれるよね」と穏やかな横顔を見せる。

カレー亭は、あえて「子ども食堂」と名乗らない。子どもから高齢者まで、どのまちのどんな人もウェルカムだ。「子

ども食堂はまだ、貧しい子どもが来るという目で見られがち。それでは参加しづらいでしょう」（原口さん）。一番大事にしているのは、食事を楽しみながらお互いが顔見知りになり、一人でも行けて安心できる「居場所」なのだ。「今、子どもたちは知らない人と話すなど言われています。地域で子どもを見守るには我々を『知っているおじちゃん、おばちゃんだ』とまず認め



40代女性と子どもたち

てもらい、信頼関係を築く必要があります。課題を抱えている子どもは大体把握していますが、この場で働きかけることはあえてしません」とも。民生委員や老人クラブ、自治会等で他の役割に就いているメンバーも多いので、必要な子どもには別のアプローチで行政機関につなぐなど支援している。

2人連れでやってきた80〜90代の女性には、星ヶ丘の住民同士でよく行動を共にするという。「リビングでは、カレー亭で食事をしますし『いきいき百歳体操』にも参加しています。私は体を動かすしにくくて、リハビリの先生がここを紹介してくれました。明日はこの朝市で面白い物ができるので助かりますね。毎回この方が私を誘って連れ出してくださいさるの」と、柳百合子さんは隣の湯本久枝さんに視線を向ける。「連絡を取り合い、励まし合って楽しく過ごしています」と湯本さん。

続けるほど腑に落ちる 「楽しめることが大事」

19時。カレー亭はのれんを下ろし、スタッフはほっと一息ついて皆でカレーの夕食をいただく。「今日の来場者は55名。風が強かったし、少なめかな」と麻生さんは振り返る。「やはり、顔なじみの方が見えてお元氣そうだと安



大にぎわいの朝市は
オープン前からみんなお待ちかね

の開催日(毎週日
・月・水・金。9
〜16時)で、買い
物後にゆっくりコ
ーヒーを堪能しな
がら見知った人と
おしゃべりに興じ
るひとときは、何
ものにも代えがた
い。

心しますね」と北野恵美子さん。星ヶ丘の独居率は今年4月時点で約36%。配偶者の介護施設への入所や看取り後一人暮らしとなり、カレー亭の常連になる人も増えている。「おいしいって言われると張り切ってます」とは本橋和子さんと木宮ひとみさん。西原恵子さんは「活動しなければ出会えないような方たちとふれあえるのも楽しい」と感想をもらす。遠方からよさこい踊りのグループが来てくれたり、アジアや南米の外国人家族の来店もあ

ったそうだ。
翌朝9時少し前。「まもなく朝市が始まりますからお越しください〜」。団地内に放送が流れる。昨夜、カレー亭が開かれていた集会所はすっかり模様替えされ、「朝市ほしがおか」(毎週日曜日開催)に変身。住民に喜んでもらいたいとリビングのスタッフがJ A直売所等から買ってきた野菜や日用品などがズラリと並ぶ。安くて新鮮で質の良いものばかりで、押すな押すなの大盛況。ちょうど「ふれあい喫茶」

会場奥のテーブルでコーヒートを味わっている男性2人組に、リビングを訪れるワケをたずねると「楽しいことばっかりあるから」と野村禎二さんは即答。隣の松原和三さんは「他のまちに住んでいるけど、コーヒーがおいしいから車で来ている。歩きづらい人が朝市で欲しいものを買って安んじられた後に、自分は残ったものを買おうと思って世間話をしながら待っているんです」

午後からふれあい喫茶の活動に入るためスタンバイしていたのは渡辺道子さん。「今朝は団地の掃除当番を済ませました。普段は『リビング花花』の活動に参加して花壇の手入れもしています。一人暮らしですけれど、カレンダーがリビングの活動で埋まっているので張り合いです」。ふれあい喫茶で渡辺さんとシフトが同じだという八木登美子さんも「私は80歳だけど、あれもせな、これもせなと思うと体が

ウキウキするんですよ。主人は家でゴロゴロしてますけどね」と笑う。

朝市で会計を担当した田中初枝さんはこう話す。「ボランティアは人のためではなく自分のため。『楽しめることが大事』とよく原口さんに言われますが、長く続けるほどそれが腑に落ちてきます。ゆくゆくは自分もお世話になりますすね。これからもできることを無理せずやっていきたい」。

ここでは、ボランティアは貢献、学び、楽しさ、活力、安らぎなどが循環することを皆が実感している。

活動もネットワークもさらに広がって



再びリビングの活動の歩みを追ってみよう。市が福祉の総合相談窓口として設置した「いきいきネット相談広場」を、リビングでは08年にスタート。16年には「街かど保健室」と改称し、介護事業所の専門職にも参加してもらい、

健康はもちろん多様な福祉課題の相談を受け付けている。保健室で専門職同士が活発に情報交換することでリビングもネットワークをさらに広げ、見守り活動をより充実させている。例えば、ふれあい訪問の利用者に留守が続けば、担当ケアマネジャーに報告することもできる。

18年には「鍵ボックス設置事業」も開始。万一に備え、住民が玄関横のメーター室に自宅の鍵を入れた鍵ボックスを取り付けるものだ。日頃からの信頼関係で暗証番号がリビングに知らされていけば、鍵を開けて発見・救助できる。この事業のおかげで、玄関先で倒れた高齢者の助けを求める声を住民が外から聞きつけ、速やかに助けられた例もあるという。

「一人暮らしの方は、孤独死はあるとしても、発見されない『孤立死』は防げるはず。そのためにも、やはり日頃のつながりが大事」と原口さんは取り

組みの意義を語る。

高齢者などが必要とする日常生活支援サービスも、「部屋の電球が切れたから替えてほしい」とリビングに頼みに来ればスタッフが無償で対応する。ごく自然に近隣同士の助け合い感覚が発揮されていて、住民にとってこれほど安心なことはない。

地域包括支援センターの西山昭子さんは、異動前に星ヶ丘を担当していた。「公的サービスだけでは困りごとを解決できない方にリビングを紹介すると、とても喜ばれます。趣味を諦めずに続けられたり、何より人とのつながりが生まれていきいきとされます。一人暮らしの要支援の方が、別の地域で暮らす子どもさんと同居を提案されたとき、『うれしいけど、星ヶ丘には皆さんとのつながりがあるから、もう少しここにおるわ』ときっぱりおっしゃいました。星ヶ丘の皆さんにとってリビングの存在は本当に大きいです」

みんなの気持ちが集まる基金 「子どもたちの支援は 先に生まれた者の役割」

人と人が助け合えば、双方向で感謝の念や心の豊かさが醸成される。それを象徴するような取り組みの一つが、17年にリビングが設立した「ロビンフッド基金」だろう。生活に課題を抱える子どもたちへの支援が主な目的で、リビングで助け合いの恩恵を日々実感する大人たちは、感謝の気持ちをこく自然にこの基金に託す。コーヒーを飲んだ帰りに、玄関に設置された募金箱にお金を入れていく人は少なくない。室内には住民が寄付した衣類や小物を安く販売して基金の原資にするコーナーも設置されていて、これを合わせる。と募金額は月平均1万円を超える。基金の賛同者もさまざま。例えば、自身の親がリビングとの関わりの中で穏やかな最期を迎えたことに感謝した米

国在住の子どもからは、毎年途切れることなく基金への寄付金が届くという。基金の趣旨に賛同し定期的に寄付してくれる地元企業も複数ある。

同基金の支援の対象や内容も多岐にわたる。「その米

国在住の方から、米国では地域の学校に寄付をして支援するという話を聞いて、素晴らし

いねと。それで我々も地域の子ども園、幼稚園、小中学校を支援しようと、基金から毎年1万円ずつ寄付しています」（原口さん）

市が中学3年生を対象に公民館で実施している学習支援の場に、無償で夜食を提供する活動も行っている。「おにぎりを購入して会場へ毎週届けています。生徒さんたちと会うことは、あえてしていません。あしながおじさん的な存在かしら（笑）。でもリビ



寄付された品をロビンフッド基金原資のために販売

ングからの差し入れだとは知らせていただいているようです」と前出の田中さん。おにぎりを食べながら感じる地域の人々の応援は、生徒たちに伝わっていることだろう。

リビングでは、支援が必要な個人や団体に食品や生活用品等の現物支援も行っている。コロナ禍で食堂が閉鎖された時期には食料等を直接届ける活動も始めたが、個人情報保護の壁でなかなか必要な人にたどり着けなかった。

そこで、保育園等を通して支援するという工夫をした。各支援に必要な品々は、大阪府や地元ケーブルテレビ局の食材支援を活用しつつも、原口さんは「できるだけ自主独立で自由に活動したい」と話す。そのため、例えばカレー亭の場合、子どもは無料でも大人は有料。継続して利用する大人の参加者は多いので、食材費などの面でも割と安定的な運営ができているようだ。

一般に、高齢者を中心とした活動グ

ループは、高齢者を柱に活動するケースが少なくない。しかしリビングは、基金等の取り組みでも分かるように子ども支援により力を注ぐ。なぜだろうか。

「少子高齢化で、否応なく高齢者支援は必然になります。けれど未来を考えるなら、我々は人口が減っていく子どもたちの支援に重きを置きたい。次世代を担う子どもたちの未来への希望を共に紡ぐことは、先に生まれた者の重要な役割」と原口さんは言う。

「我々のような地縁ボランティアは、地域の理解と賛同がなければ前に進めません。地域のさまざまな人、団体、事業所などと顔の見える関係を築きながら持続可能な活動を推し進めるには、より身近な生活の中に新しいニーズを掘り起こすことも大切かもしれません」。地域の体

リビングほしがおか

2008年、府営の高層団地の集会所を拠点に始まった地域住民による「誰もが集い交流できる居場所づくり」活動。「ひとりを大切に、安心とふれあいの町づくり」がモットー。ナイトリビングDANCHI カレー亭、朝市ほしがおか、ふれあい喫茶、街かど保健室、カラオケ、いきいきサロン、いきいき百歳体操、専門職のランチミーティング、子供育成会、書道教室、折り紙教室等、多彩な活動を展開。

●連絡先 〒596-0004 岸和田市荒木町2-22
電話 072-441-9331
(日・月・水・金曜日 9～16時)

力に合わせた活動を地道に続けていきたい、と原口さんは力強く語ってくれた。助けられた側が、時を経て助ける側となり活躍する、とよく耳にする。活動継続の問題に悩む地域は多いが、リビングほしがおかのような思いと取り組みにもヒントはあるかもしれない。

いいきき わくわく

子どもと一緒に 地域で輝こう



子どもたちがつくる児童館 希望のひかり「らいつ」

石巻市子どもセンターらいつ（宮城県石巻市）

東日本大震災の被災地、石巻市。震災後に市内に誕生した児童館「石巻市子どもセンターらいつ」での子どもたちの声が生かされた活動取材しました。

（取材・文／編集部）

●「まちのために何かしたい」子どもたちへ

昼間は乳幼児を連れた保護者たちが、下校時刻を過ぎると家にランドセルを置いた小学生たちがやってくる。夕刻が近づくと中高生も加わり、開放的な木造りの建物に笑い声がこだまする。

ここは、JR仙石線の石巻駅から徒歩10分のところにある児童館「石巻市子どもセンターらいつ」（以下、「らいつ」）。「何をしてもいい 何も

しなくてもいい 子どもたちの居場所」として9時半～19時まで開館し、スポーツ室、楽器やカラオケがある防音室などがあり、飲食可能なオープンスペースではボードゲームやおしゃべりで子どもや保護者たちがのびのびと過ごす。土日ともなると、一日中にぎわいが絶えない。

「らいつ」設立のきっかけは、東日本大震災のあった2011年。公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）が、岩手県と宮城県



石巻市子どもセンターらいつ。
屋上はイベントスペースにもなる



キッズコーナー（左）と、明るく解放感あふれる館内（右）

で小学4年生〜高校3年生約1万1000人にアンケートを実施したところ、約9割が「まちのために何かしたい」と回答した。この声を受けて、岩手県山田町・陸前高田市、宮城県石巻市の3地域で「子どもまちづくりクラブ」が発足し、石巻市では同年6月下旬に活動を開始。復興していくまちがこんなまちになったらいいなと子どもたちが意見を申し合ひ、「夢のまちプラン」を作成して、市に提案した。その想いを実現するため、SCJから寄贈されたのが児童館「らいつ」である。コンセプトは、「石巻の活性化のために中高生

が中心となつてつくり、運営していく施設。みんなが過ごしやすい、子どもの想いを世間の人たちに伝えられる場所」。地域と連携しながら子どもたちの企画・デザインを反映して、「らいつ」は13年12月に完成。公募で決まった「らいつ」の名には、子どもの権利（rights）の拠点、未来の希望のひかり（lights）として存在してほしいという願いが込められた。

●安心して過ごし、自由に意見を出し合える子どもと大人が一緒に環境づくり

取材した日は、月2回の「子ども会議（通称・らいつ会議）」が開かれていた。小学4年生〜高校生世代が集まり、「らいつ」の利用方法や本・遊具について活発に意見を出し合つて、決定している。ここで出た意見は、「らいつ」で年3回開催されている、おとな委員5名と子ども委員5名からなる「運営会議」で話し合ひ、実行するための最終決定をする。

「らいつ」の指定管理者である「NPO法人ベビ



館長の荒木さん



子ども会議の様子

ども参加事業」「子どもエンパワー事業」「子育て支援事業」等がある。「子ども参加事業」の中には「子どもまちづくりクラブ」「子ども会議」「子ども企画」などの活動があり、「子ども企画」は、子どもたちがいつでも自由に「らいつ」でや

「スマイル石巻」の代表理事で「らいつ」館長の荒木裕美さんは、子どもたちを見守りながら、「子どもたちがワイワイと自由に意見を言えることはとても大切です」から「らいつ」では、設立当初から子どもたちが安心して過ごさせて、その気持ちや考えていることを大人が受け止め、一緒に考え、市とも連携して実現できるようにすることを一番大事にしてきました」と語る。

「らいつ」の事業には、「子

りたい遊びやイベントを提案できるといふもの。企画で使える予算も付いており、実現可能性や「らいつ」にとって良い変化があるかなど、子どもたちの承認を受け採用されれば、館内に参加者募集のポスターを張り出すなどして実行されていく。

また、「石巻がどうすればみんなにとって暮らしやすくなるか、盛り上がるか」等をテーマに、子どもたちがアイデアを出し合うワークショップ「まきトリーク」では、これまで市長との意見交換や提案なども行ってきた。実現した活動の一つに「移動型児童館」がある。これは、「らいつ」のような児童館



雄勝地区で実施された「移動型児童館」の様子。地域住民ボランティアも参加している



子ども企画はいつでも募集中！



佐野亜希さん・スミレさん親子

●子どもと地域住民も「らいつ」で交流

がまだ市内の他の場所になく、家が遠い子たちは来ることができないため、どうするかを「まきトーク」で話し合い、市長に伝えたことがきっかけとなった活動だ。「らいつ」のスタッフが地域の子ども支援団体、プレーワーカーなどの協力を得ながら市内各地区の公民館等をまわり、その地区の子どもたちが居場所のように集まって遊べるようにしたところ、町内会など地域住民もだんだんと参加・協力してくれるようになり、つながりが広がっているようだ。

まちづくり関連の一般社団法人スタッフ、佐野亜希さんは、昨年度まで運営会議のおとな委員で、

今年度からは小学3年生の長女スミレさんが子ども委員「見習い」としてバトンを引き継いだ。「運営会議

で子どもが自発的に意見を言い、大人と議論することに驚きました。『らいつ』は、こどもたちがありのままでいられる場所です」と亜希さん。

木村啓子さんは、民生委員兼主任児童委員で生活支援体制整備事業の第2層協議体メンバーでもある。

「高齢者の方々は子どもたちと関わる機会がまだ少ないですし、子どもに関する情報もどこで知ればいいのか分かりません。『らいつ』がこれからもそれに応えられる場として機能して欲しいですね」

木村さんは、市内2地区の民生委員児童委員と市社会福祉協議会が主催して実施する「石巻・門脇地区世代間交流事業」も手がけている。今年9月には、市立石巻小学校の体育館で高齢者が昔の遊び（あやとり、お手玉、けん玉など）を子どもたちに教えるイベントを開催し、「らいつ」にきている子どもたちとスタッフも一緒に参加したという。

亜希さんと木村さんは「こうして世代の違う者同士がここでしゃべりや情報交換できること自体が、



木村さん



「こどもまんなか」宣言の際の子どもたちと、
石巻市の齋藤正美市長（左）

● 好きだから住み続けたい

の「こどもまんなか応援サポーター」となったのも、10年以上にわたって地域と子どもたちが「らいつ」で共に取り組んできた成果の一つだろう。

「らいつ」の人たちに思いを聞いた。

近藤日和^{ひより}さんは、卒業式を1週間後に控えた小学6年生のときに被災。その後、「子どもまちづ

多世代をつなぐのにとても大事だよね」と笑い合う。

地域のさまざまな住民と交流できる場として月一回「らいつ」を開放する「おちゃっこらいつ」なども好評だ。石巻市が今年1月「こどもまんなか」宣言を発表し、こども家庭庁

くりクラブ」に参加して「らいつ」の企画・デザインづくりにも携わり、利用者としても通ったそう。高校卒業後に1年ほどボランティアとして活動した後、職員となった。

「建ったばかりの頃、『らいつ』には今のようにおもちゃもなく、地域の人たちにも知られていませんでした。でも、子どもが中心になってさまざまな企画を考えて実行し、今はこんなにいろいろな物もそろって、10年以上関わってきてよかったと思っています。ベビースマイル

が指定管理者になってからは赤ちゃんや小さな子たちの視点も入って、0歳から18歳の子が利用する児童館としてとても良い場所になっていきます」。近藤さんは、震災の語り部としても活動している。

加沢日南^{ひなた}汰さんは震災時5歳。それでも、当時のことを忘れたことはない。高校3年生になり、長年通った「らいつ」からもうすぐ卒業する。



近藤さん（左）と加沢さん（右）



今年1月の10周年記念イベントの様子



勝亦さん

市内の大学に進学して、将来は地方公務員になるかまちづくりに携わりたいという。

「震災で失われ、写真で見えたことのない昔の商店街をまた見ることができたら楽しいだろうな、と思っています。石巻は人があたたかい。使命感じゃなくて、好きだからここに住み続けたいんです」

勝亦^{かつまた}隼人さんは、小学1年生で被災。中学3年生から「らいつ」に通い、今年4月からアルバイト職員となった。

「大型商業施設やカラオケ店に行くのもいいですが、ここには人とのふれあいがあるので。地域の人や『らいつ』運営に参加している

大人たちと話す機会をもらったことも、本当に良い経験になりました。

これからも、子どもたちが幅広い世代やいろいろな人たちと交流できる場をつくりたい」

SCJの元スタッフで今は副館長を務める吉川恭平さんは、震災直後から「らいつ」の誕生と成長を見守ってきた。東京から石巻に移住して9年になる。

「今年1月、『らいつ』はオープン10周年を迎えました。その時点で利用者は延べ25万人を超えています。記念イベントには、子ども時代に利用していた人たちも集まって、みんな笑顔で『変わってないね』と懐かしんでいたのを見てとてもうれしく思いました」

* * *

震災後の石巻に、希望のひかりとして誕生した「らいつ」。このまちを愛し「住み続けたい」と思う子どもたちの活動がこれからも広がっていくのが楽しみである。



副館長の吉川さん

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、子ども食堂、移動支援、何者でもない人たちの食堂を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

神奈川県藤沢市

地域コミュニティ活性化のため 食堂による居場所づくり

長後みんなのおうち食堂

助成金額 15万円

「長後みんなのおうち食堂」は2023年4月に設立。PTAや子ども会、自治会など半強制的な組織への参加が消極化する一方で、孤独死やヤングケアラー等、地域のつな

がりがなければ解決できない問題も増えていることから、安心安全な食事と居場所を定期的に提供し、薄れつつある地域のコミュニティ活性化、親世代の負担軽減等につなげようと活動しています。団体役員、藤沢市社会福祉協議会、コミュニティ

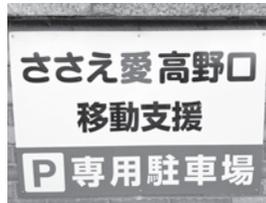


「長後みんなのおうち食堂」で食事をする人たち

ソーシャルワーカーと話し合いを重ね、同年9月には毎月第3日曜日に子ども食堂と世代間交流につながる遊び場の提供を開始しました。

今回の助成金では、業務用炊飯器やIHコンロ等を購入し、ボランティア行事保険に加入。また、市社協生活支援コーディネーターの協力もあつて、市老人福祉センター「こぶし荘」が光熱費免除で会場として貸し出されました。

これにより、子ども食堂では高校生以下の子どもと70歳以上の高齢者は利用無料、その他の人は200円で食事ができ、孤食を防ぎ、食を通じた居場所の提供ができるようになりました。食堂は100名以上が来場、ボランティア20名ほどで運営。子ども同士、親同士で会話が弾み、食後の遊びの広場では小中高生と大人がふれあい、それをボランティアが見守るなど、この活動が重要な役割を担っているとの思いを新たにしたり、と報告をいただきました。



移動支援活動の様子と、基金助成金による駐車場看板



和歌山県橋本市

「とりあえずやってみよう!!」の精神で 移動支援を開始

ささえ愛 高野口

助成金額 15万円

「ささえ愛 高野口」は、橋本市高野口地区第2層協議体を母体として2021年に設立。協議体で生活支援の必要性が話し合わせ、協力会員を募集して活動を開始し、同地区の高齢者に対して草むしりやごみ出し、話し相手、買い物代行等を有償ボランティアにより行ってきました。22年度は延べ195件の支援を実施し、同地区区長会と連携してチラシ配布の協力や助言をもらい、社協や行政も毎回、会議に参加して後方支援しているとのこと。

移動支援には事故の不安等もあり実施できないと考えていましたが、行政の協力が得られればできるかもしれないという有志がいたため、同年5月に総会で正式決定し、有志8名が中心となって運営内容を検討。市から車両購入補助を受け、



研修や協議を重ねて今年4月に運行を開始しました。現在は週3日の買い物送迎、週6日の通院送迎・付き添いを有償で行っています。

今回の助成金は、周知のためのチラシ作成、車装着マグネットや駐車場看板等の備品購入、自動車保険料等に活用されました。

やる前にあれこれ考えるのではなく、「とりあえずやってみよう!!」の精神で高齢者の困りごと解決に取り組んでいる皆さん。「利用者から『ありがとっ、また頼んどくわよ』と言ってもらえることが何よりもうれしく、それを活動の原動力として今後も取り組んでまいります」と頼もしい報告が寄せられました。

大分県大分市

みんなで作り、みんなで食べる 何者でもない人たちの食堂

NPOチームおせっかい

助成金額 11万円

「NPOチームおせっかい」は、2022年10月から大分市の坂ノ市公民館で月1回、単身者や孤独を感じている人

など、高齢者や子育て世代に比べて支援が行き届きにくい人たちを対象に、地域食堂「何者でもない食堂」を開催。調理はチームおせっかい、ボランティア、参加者で行い、1回平均10人程度が訪れています。参加費は500円、入退出自由、食後は部屋を移動してゲームや会話など参加者同士で交流します。

今回の助成金は、会場費や食材、消耗品、備品の購入に充てていただきました。

参加者からは「子ども食堂には参加しづらかったのでこんな場所があったよかった」「普段は全然料理をしないが、みんなと交流しながらの調理はとても楽しかった」等の感想が寄せられています。また、他の場所での開催の要望があったことから、昨年度は場所を2か所増やし、周辺の飲食



調理はみんなで。野菜の寄付等により品数も豊富

「地域助け合い基金」 状況のご報告

申し上げます。

地域助け合い基金は、地域共生社会を目指して活動する地域住民の活動を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ

(10月15日) 当財団ホームページ開示時点
◎寄付受付額
このうち当財団より1億6162万1000円を供出
248件 1億9434万337円
◎助成実行額
1194件 1億8390万8965円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

店やスーパーからは広報での協力が得られました。新たな取り組みとしてテイクアウト弁当や、お酒ありの何者でもない食堂の開催、参加者が講師のモルツク体験などを行い、「いつもと違ったことができ楽しかった」と大好評だったそうです。

何者でもない人たちは行政等との関わりも薄いため、

活動の認知度はまだまだだと感じているとのこと。直接的支援はできずとも、今後も月1回の活動を続け、誰かの居場所になれるよう地道に活動していきたい、と報告をいただきました。



— 認知症との
新しい向き合い方

社会医療法人財団石心会理事長
川崎幸クリニック院長

杉山 孝博



(すぎやま たかひろ)

1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニックス院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事(副代表)。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる 認知症の9大法則と1原則」(法研)、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な行動がわかる本」(講談社)など多数。

認知症の症状と、 認知症の人の世界を理解する

— その2 —

認知症の人は、「ひどい物忘れ」の特徴のように、自分が話したり、聞いたり、行動したことはすぐに忘れてしまいますが、感情の世界はしっかりと残っていて、目に入った光が消えたあとでも残像として残るように、その時抱いた感情は相当時間続きます。この特徴を「感情残像の法則」と呼んでいます。出来事の実関係は把握できなくても、感情の波として残るのです。

認知症の人の感情が鋭敏で変化しやすいことは、

介護したことがある人なら誰でも経験しています。介護者(特に一生懸命介護している人)から丁寧に説明を受けても、その内容はすぐに忘れてしまい、相手をうるさい人、いやなことを言う人、怖い人ととらえてしまいます。よい感情も残るので、本人の気持ちを受け入れて合わせれば、穏やかな表情にかわります。

これをどう理解したらよいのでしょうか。

私たちが他人から忠告を受けた場合、その人に向



かって、「うるさい。余計なお世話だ」とは言わないと思います。なぜなら「自分のことを思って忠告をしてくれたのだ」「同じ立場であれば自分でも同じ言い方をするだろう」などと、瞬間的に考えて、その時の感情をコントロールするからです。

それが可能なのは、判断力・推理力などの理性があるからです。知的機能の低下した認知症の人は、一般常識が通用する理性の世界から出てしまつて、感情が支配する世界に住んでいる人である、と考えたらよいのではないでしょうか。

介護者は認知症の人が穏やかな気持ちになれるよう、同情の気持ちで接することが必要です。認知症の人を介護するときには「説得よりも同情」です。

私は介護者に対して「認知症の人との間に鏡を置いて、鏡に映ったあなたの気持ちや状態が認知症の人の状態です。あなたがイライラ、カッカしている時には認知症の人も同じように反応します。穏やかに対応すれば、認知症の人も必ず落ち着きます。介護サービスを上手に利用して余裕を持つようにしましょう

しょう。そのほうがあなたにとつても認知症の人にとつてもよいことです」と話しています。

それでも、介護者からは、「先生はそうおっしゃいますが、介護する者の立場に立ってみてください。言うことも聞いてくれない、注意すると怒り出す人に、にこにこよい顔ばかりしていられません。おむつを替える時、お尻をつねってやりたいと思うことがあります」という反論や本音が聞かれます。そのような介護者に対して私は、「人間ですから感情的になるのは当然だと思います。しかし、その時は介護の負担が一番大変な時期です。負担を軽くするために、はよい感情を残すように対応したほうが、あなたにとつてトクになるのですよ」と話しています。

最初のうちはむずかしいかもしれませんが、「どうもありがとう。助かるわ」、「そう、それは大変だね」、「それはよかったね」、「お願いします」、「ごめんさい」などの言葉が言えるようになれば、その介護者は上手な介護ができていると言えるでしょう。

(次号に続く)

人生100年 地域とつながる施設とは

7

日本の幸福度ランキング

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

毎年3月に国連の関係機関が発表している「世界の幸福度ランキング」で日本は143か国・地域で51位です。ちなみに1位はフィンランドです。

報告書では、1人あたりのGDP、社会的支援、健康寿命、人生の選択の自由度、寛容さ、腐敗の少なさという6つの変数を使えば、国や年による幸福度の違いの4分の3以上を説明できるとしています。日本と上位の国々を比べると、健康寿命では日本が上回り、1人あたりのGDPも上位との差は大きく

なかったのですが、人生の選択の自由度や寛容さが低くなっていました。

わたしが、Uビジョン研究所を創設し、特養ホームなど高齢者施設のサービスの質を評価し保証する仕組みをつくり上げるのに苦労したのは「生活の質・幸福感」とはなにかということでした。アメリカのミシガン州とミネソタ州の認証施設にも1週間にわたり視察・調査に行き感じたことは、生活の質や幸福感はそれぞれの国の文化や社会が大きく影響す



(ほんま いくこ)

図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。ハ表彰V2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。ハ著書V多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みはAmazonかUビジョン研究所（電話03・6904・4611）へ

るため、日本独自の生活の質を検討する必要があるということでした。

日本は礼儀や清潔を尊重し、自然の変化を食事や生活環境に取り入れて、おもてなしをしてきた生活文化があります。自分の思いを伝えるよりもその人の思いを感じ取っておもてなしをすることに価値をおいていたと思います。

Uビジョン研究所では、高齢者施設での生活の質を「衣」「食」「住」「介護」「楽しみ・趣味・関心」に分類し、そこに個人の考え方や思い（自己決定権）がどのように反映されているかを評価基準としました。

「衣」身だしなみ」頭からつま先まで清潔できちんとしていくこと。髪に櫛がとおっており、目やにがなく食べこぼしで服が汚れておらず人間らしい姿でいること。

「食」地域の食文化を大切に日常生活や行事に活かされていること。本人の好きなもの嫌いなものなどが把握されており、代替えの食事が提供されていること。

「住」その人が自分らしくいられる居心地のよい居場所があり、プライバシーが守られていること。

「介護」一人一人必要な介護が提供されていること。また、事故でない限り、延命や医療にかかることに關して、医師や家族の判断だけで決めるのではなく、当事者の意向を把握し尊重できる支援体制があること。

「楽しみ・趣味・関心」一人一人の楽しみや喜びが尊重されること。

安全が優先され管理的になりがちな老人ホームです。個人の生活の中で選択の自由度を高めるには職員だけでは支援できません。地域の人たちが積極的にボランティアとしてかかわっていくことで生活の幅が広がります。散歩に行きたい、コーヒーが飲みたい、話がしたい、碁・将棋がしたいなど生活の質は地域の生活そのものです。

人生の幸福度を高める「人生の選択の自由度や寛容さ」における日本の高齢者の課題に取り組むためには、地域ボランティアを増やしていく仕組みをつくっていくことがポイントです。

助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円（税込・送料別）となります。

みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



いつでも誰でも行ける場所を 広げよう！ 居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2024年9月1日～9月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

さわやかパートナー個人 (43件)

(都道府県別50音順)

北海道	澤出 桃姫子	高橋 照夫	高島 一雄
宮城県	小野寺 憲一	滝口 由美子	高橋 清美
秋田県	伊藤 和喜	薄 幸夫	藤沼 彰久
茨城県	関 実枝子	田中 光子	柳田 延和
群馬県	津田 敬子	平林 千津子	神奈川県
埼玉県	関山 二朗	森川 和子	石毛 陽子
東京都	埼玉 清	天野 寛子	塩見 治雄
千葉県	佐藤 清勝	粟井 清	鈴木 裕司
東京都	島村 孝一	石関 里英	清水 喜久夫
		河内 理美	山梨県
		小泉 純二	清水 喜久夫
			岐阜県
			三輪 正善
			静岡県
			高部 宗夫

愛知県

清水 サチ子

野村 圭一

三重県

安田 順子

滋賀県

伊藤 博

京都府

大江 薫子

水野 泰

大阪府

中田 壽子

兵庫県

高嶋 宏臣

高橋 伸治

奈良県

増田 喜三郎

香川県

行成 輝見

福岡県

石井 久光

宮崎県

富高 操子

さわやかパートナー法人 (5件)

(50音順)

- 曙ブレーキ工業労働組合
- 一般社団法人全国労働金庫協会
- 東京海上日動火災保険株式会社
- パラマウントベッドホールディングス株式会社
- 富士急行株式会社

一般ご寄付 (4件)

(50音順)

- 板谷 辰夫 (1万円)
- 黒田 欽子 (5千円)
- 一般社団法人日本メンズファッション協会 (12万5000円)
- 藤本 裕一郎 (3万円)



さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

新人も先輩も一緒に

「みんながつながる情報交換会vol.3」開催

■ 京都府

【9月5日】京都府内のS
Cが集う「みんながつながる情報交換会vol.3」が開催され、24名が参加した。実行委員は、京都府高齢者支援課の後藤麻友氏と滝本尚子氏、久御山町SCの松下一恵氏、宇治市社会福祉協議会所属SCの松尾まみ氏、宮津市社協所属S

Cの大江健太郎氏、与謝野町社協所属SCの長島悦子氏、京都府のさわやかインストラクター古海りえ子氏、当財団。

できるだけたくさん仲間とつながり、現状の課題を共有し、できることを探していくことを目的に実施している情報交換会のため、

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター

食事を取りながら自由な意見交換ができるランチミーティングも企画し、大変盛り上がった。

午後からはグループ

ワーク。テーマは、

①「SCの皆さんに聞きたいこと!」、

②「困っていること

!」。メンバーを入

れ替えて2回行った。

こちらにも議論が大変

盛り上がり、①②と

もに皆が共感できる

内容で、発表ではこ

の情報交換会恒例の



京都府「みんながつながる情報交換会vol.3」
「イイネ!」カードで盛り上がった

「イイネー！」カードがたくさん上がった。

参加者同士、取り組みの
情報交換ができ、課題に
ついても励まし合い、解決に
向けてできることを話し合
っていた。経験1年未満の
参加者からのアンケートで
「SC業務は100人いた
ら100通りある。型には
まろうとせず、もつと自
由でよい。」待つことが
重要。しんどいし、待った
からと言って必ず良い方向
に行くわけではないけれど、
地域の方の想いに寄り添う
ことが大切と先輩SCさん
から学べたことがよかつ
た」という内容の回答があ
った。新人も先輩も一緒に
なって頑張っているように
感じている姿に感動した。昨年

から始めたばかりの情報交
換会だが、現役SCである
実行委員の皆さんが自分た
ちでつくり上げていく姿も

自由な意見交換と仲間づくり 「本音で語ろう!!情報交換会」開催

■大阪府

【9月20日】大阪府で恒例
となった「本音で語ろう!!
情報交換会」が開催され、
同府内市町村で新たに配置
されたSCやベテランSC
など35名が参加した。

府からの情報提供等、ア
イスブレイク等の後、グル
ープワークを実施。テーマ
は、①「現状の確認 チェ
ックリストで話してみよう
!」、②「聞きたいこと、
詰まっていることを話して

頼もしく感じた。今後も応
援していく。
(目崎 智恵子)

みよう!」、③「意外
と知らない近隣市町村
と話してみよう」
の3つ。各グループに
財団の助け合い推進パ
ートナーである実行委
員が進行役として入り、
テーマごとにグルー
プのメンバーを入れ替え
て行い、終了時に都度
まとめを各班ごとに発
表して、全員で内容を
共有した。



大阪府「本音で語ろう!!情報交換会」の様子

参加者アンケート結果で
は、「情報交換ができたし
たか?」に対して、「すこ
くできた・できた」が95%
を占めるなど、好評であつ
た。SC1年目の参加者か
ら「住民へのアプローチ、

地域資源の活用について、
たくさん情報を得ることが
できた」との感想が寄せ
られるなど、経験年数の異
なるSC同士が情報交換し

ながら共に学び合い、住民
主体の地域づくりが進んで
いくことが期待できる情報
交換会となった。

(目崎 智恵子)

ネットワーク化と目指す地域像実現に向けて

地域包括ケアシステム実務者圏域会議全体会

■大村市(長崎県)

【9月25日】大村市で、県
のアドバイザー派遣事業を
活用した「令和6年度大村
市地域包括ケアシステム実
務者圏域会議全体会」が開
催され、第2層協議体メン
バー、市地域包括支援セン
ター、長崎県など約100
名が参加した。第2層協議
体をより地域課題に対応で
きる体制(メンバー)で推
進するために、あらためて

事業の意義や住民主体の地
域づくりのための協議体を
理解し推進すること、また、
参加者が互いの活動を知り
ネットワーク化することを
目的として実施され、当財
団・鶴山が講師を務めた。
昨年度も、同市の住民フォ
ーラムと3回にわたる助け
合い創出勉強会に協力して
いる。

包括による制度説明等の

話に続き、鶴山より「目指
す地域像を考えよう」とい
うテーマで講演。新たな協
議体メンバーがそれぞれの
第2層圏域が目指す地域像
を話し合うことを狙いとし、

なぜ助け合いが必要か、財
源・人材の問題等、同県佐
々町や全国の多様な事例を
「地縁活動」「居場所」「有
償ボランティア」に分けて
紹介。グループワークは

「目指す地域像を考えよ
う」というテーマで実施
し、模造紙が埋め尽くさ
れるほど多くの意見が出
た。SCや町内会長の発
表は、住民のニーズがよ
く分かる内容だった。

最後に鶴山が「今日は、
5年後10年後にこんな地
域にしたいという同じ方
向を見て話し合うことが
狙い。今後は、各地域で
協議体として『目指す地
域像をどう実現するか』
が大切。グループワーク
で出た課題の解決にも取



「大村市地域包括ケアシステム実務者圏域会議全体会」の様子

り組んでほしい。今後の活動を楽しみにしています」とまとめた。各地域の今後

に期待したい。

(鶴山 芳子、窪田 健二)



情報・調査事業

「広がれボランティアの輪」連絡会議30周年記念 「ボランティア全国フォーラム2024」で 分科会を担当

当財団が当初から関わってきた、ボランティア・市民活動の推進・振興につなげるための環境・気運づくりをすすめる「広がれボランティアの輪」連絡会議は、今年30周年を迎えた。そこで、9月7日(土)・8日(日)の2日間、東日本大震災の被災地でこれまでのボランティア活動を振り返るとともに、明日のボランティア・市民活動を皆で考

える機会とすべく、宮城県仙台市の東北福祉大学において記念イベントを開催した。初日の全体会は現地とオンラインのハイブリッド方式で、社会福祉法人全国社会福祉協議会会長・村木厚子氏の記念講演を皮切りに、「ボランティアは文化として社会に定着したか」をテーマにシンポジウムを行い、同連絡会議顧問・山崎美貴子氏(東京ボランテ

日本メンズファッション協会様より

今年も「グッドエイジャー賞」チャリティーによるご寄付

9月4日、一般社団法人日本メンズファッション協会様による「第22回グッドエイジャー発表・授賞式」が開催され、会場で行われたチャリティー活動で12万5000円の募金が集まり、当財団に全額をご寄付いただきました。

同協会は、高齢化社会の意識変化に注目し、長寿時代を豊かにいきいきと楽しく、かっこよく過ごすグッドエイジング・ライフを目指した「グッドエイジング運動」を立ち上げ、そうした魅力ある人生を送られている方を「グッドエイジャー賞」として顕彰しています。

このご寄付は「グッドエイジャー賞」の主旨と当財団の理念に親和性があることや、1997年に当財団の永世名誉パートナーである堀田力前会長が同協会の「ベスト・ファーザー賞」を受賞された縁もあり、当財団にいただけることとなった経緯があります。

頂戴したご寄付に感謝し、ふれあいのあるあたたかい地域社会づくりを目指す活動に大切に活用させていただきます。(大石 敏晴)

イア・市民活動センター所長）、同連絡会会長・上野谷加代子氏（大阪市ボランティア・市民活動センター長）ほか、日本大学文理学部教授・諏訪徹氏、同志社大学社会学部教授・永田祐氏の両幹事らが登壇した。

2日目は東北福祉大学および同連絡会議構成団体の企画・運営により、6つの分科会を実施した。テーマは第1分科会「学生ボランティアを展望する」、第2分科会「プロボノの力と専門性を活かした企業とボランティアのいい関係」、第3分科会「誰もが心地よく暮らせる地域づくり」空き家リノベーションからエリア・リノベーションへ」、第4分科会「孤独や孤立を

ふせぐ豊かな地域づくり」つながりを紡ぐボランティアの役割」、第5分科会「災害時のボランティア活動を考える」、第6分科会「しやべり場〜人生100年時代のボランティアを語り合おう」。当財団は第4分科会を企画・運営し、全社協地域福祉部長・高橋良太氏を進行役に、3名の登壇者を迎えた。

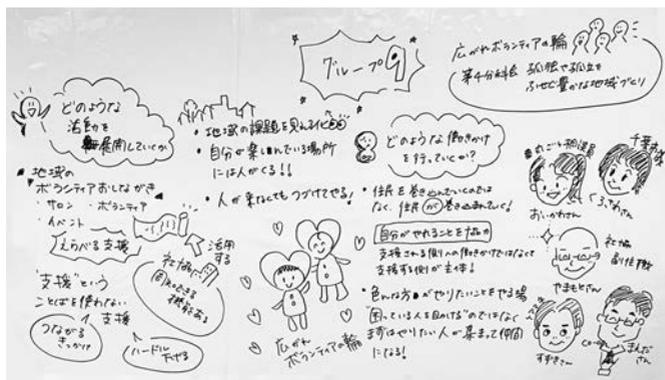
地元仙台市からはNPO法人地域生活支援オレンジねつと理事長でさわやかインストラクターの荒川陽子氏。荒川氏からは、地域の家庭問題を見える化し、お互いを思いやる心が育つ社会をつくるための住民同士の生活支援活動を2005年にスタートし、そこから

平日10〜17時に開催しているコミュニティカフェ、配食、子ども食堂などへ活動が広がり、孤立している家庭ともつながっている様子が紹介された。

続いてNPO法人パノラマ理事長の石井正宏氏が、神奈川県内2つの県立高校で開催している校内居場所カフェについて紹介。ここには年間200人のボランティアが参加しており、ボランティアたちのサードプレイスにもなっているが、生徒たちのつばやきを拾うことから信頼貯金を貯めていき、「経済」「文化」「つ

ながり」という3つの貧困、そして経験や機会の格差をなくすためのさまざまな工夫が語られた。

同連絡会議の構成団体で



グループワークでは、つながりづくりについて参加者から多様な意見が出て盛り上がった

ある一般社団法人全国食支援活動協力会専務理事で社会福祉法人ふきのとうの会理事長の平野覚治氏からは、子どもから高齢者まで、幅広い世代に対して食を通じた居場所づくりを、ネットワークを構築しながらサポートしている様子が事例を交えて紹介された。

後半はグループワーク形式で、地域（活動実践者・ボランティア等）が孤立しがちな人たちとつながりを創っていくためには、①どのような働きかけを行い、

②どのような活動を展開していけばよいか、を話し合ってもらい、それぞれのグループから発表してもらった。

各グループとも積極的な熱気ある話し合いとなり、発表では「ゆるいおせっかい」「支援ではなく居場所づくり」「その人に合った役割を一緒に探していく」等のキーワードが発信され、寄せられたアンケートでも「とても参考になった」という回答が多かった。

（上田 恵子）

事務所より

●10月は、財団職員もランチを取りながらなど「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」の配信を財団の会議室で視聴。ご参加いただいた皆様と同様、職員もパネリストによる新しい情報を得てさらに勉強させていただく機会になった。

さわやか福祉財団は 皆様のご支援によって活動しています

さわやかパートナー
（賛助会員）として、
ご支援をどうぞよろしく
お願い申し上げます。



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、どなたでもお申し込みいただけます。
税制優遇措置もあります。詳しくは、42ページをご参照ください。

◎1回ごとに金額を自由にお決めいただく一般ご寄付も、随時受け付けております。

ご寄付全般に関する
お問い合わせ

電話 (03) 5470-7751

メール mail@sawayakazaidan.or.jp

「連合・愛のカンパ」

団体立ち上げ・新規事業立ち上げのための準備金支援のお知らせ

さわやか福祉財団では、今年度も日本労働組合総連合会（連合）「連合・愛のカンパ」より資金を提供いただき、地域における助け合い活動の団体立ち上げや既存の活動団体における新たな活動の立ち上げを支援するための助成を行います。

少子高齢化、人口減少の影響や頻発する自然災害による被害の中で、各地で人と人とのつながりや助け合いの必要性も高まり、活動の創出や取り組みの再開が活性化し始めています。

各市区町村のSCや協議体が支援する助け合い活動（地縁組織やNPO団体、グループ等）の立ち上げ等を支援することにも、ぜひご活用ください。

今回の助成対象は、2023年10月以降に設立された団体、または、既存の団体であっても「新しい事業」を開始した場合となります。1団体につき上限15万円（約16団体）を予定しています。

応募期間

2024年10月10日～2024年11月29日

助成対象

2023年10月～2024年11月末までに立ち上がった、または、開始する予定の新しい活動

詳細や応募方法は、当財団ホームページの「お知らせ」をご参照ください。

【URL】 <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

<お問い合わせ>立ち上げ支援プロジェクト（担当：大石、小林）

電話：(03) 5470-7751 メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

じぶんの町を良くするしくみ。



赤い羽根共同募金は、あなたの町子どもたち、高齢者、障がい者などを支援するさまざまな福祉活動に役立てられます。

災害時には、「災害ボランティアセンター」の設置や運営など、被災地支援にも役立ちます。

赤い羽根共同募金

www.akaihane.or.jp

みんなの広場



投稿募集

皆様のご意見や情報をお待ちしています

掲載記事へのご感想、地域の助け合いや居場所の情報、社会参加の取り組みや、日頃気になっているテーマなど、ぜひお寄せください。

送付先

さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛。郵送の場合は、付属のハガキや投稿用紙をどうぞご利用ください。

E-mail :
pr@sawayakazaidan.or.jp



地域に外国人が増えています。一般に見えにくいところでも彼らは社会の土台を担っており、介護の外国人材が活躍している自治体もあります。世代が若く地域の担い手となる人々でもありますが、地域との交流が十分に進んでいないと思います。日本人が毎年80万人以上減ると予

多文化共生
皆で考える機会を

毛受 敏浩さん

東京都

測される中で、今後、外国人に頼ることが増え続けるのは間違いないでしょう。この変化に日本社会が対応できるかどうかは、今後の対応次第ではないでしょうか。多文化共生をどう進めるかについても皆で考える機会があればと思います。

投稿大変ありがとうございます。
働くご本人やそのご家族が地域や学校から孤立してしまう状況を憂えています。当財団としても課題として引き続き皆様と考えていければと思っています。

みんなで、誰もが安心して暮らせる
地域共生社会をつくりましょう



公益財団法人



公益財団法人

さわやか福祉財団

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい



編集後記 ●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」のアーカイブ配信は11月30日まで続きます。どうぞご活用ください。表紙裏と本文(P4~)に速報を掲載しました。●「活動の現場から」は「だんじり祭」で有名な大阪・岸和田市から。独自の基金で子どもたちを応援するなど、素晴らしい取り組みがありました(P9~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、東日本大震災の被災地、宮城県石巻市。子どもの権利を尊重し、子どもたちの声を大人たちが受け止め共に実現している児童館のユニークな活動です(P16~)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

辻村
哲夫



- 公益財団法人学習情報研究センター理事長
文科省OBとして子供たちの学習支援、特に情報社会に生きていくための基礎学力育成の活動を続けています。また最近、ピアノを始めました。毎日楽しんで続けたいと思っています。

先日、被災者と支援者とが別れを惜しむ被災地からのテレビニュースを見た。

言い尽くせない感謝と満足感がこみ上げたのだろう。

どの人の目にも涙があった。

助け合い・絆。

これこそ温かく強靱な社会の土台であることを実感した。

そして、このことを小さな頃から

みんなで共有したいと強く思った。

さわやか 11月号

通巻375号 2024年11月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
取材協力 七七舎
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

地域で子どもたちの共感力を育てる、
そしてシニアも元気になる

「ともあそび」を始めませんか？

子どもたちが、幼い頃から地域のいろいろな人と「あそび」を通じて
関わり合う中で、「共感力」を育ていける地域づくりを進めましょう！

子どもと遊ぶことで、シニアも地域もエネルギーをもらい元気になれます。みんなで子どもたちを育てる地域づくりに、「ともあそび」冊子をぜひご活用ください。

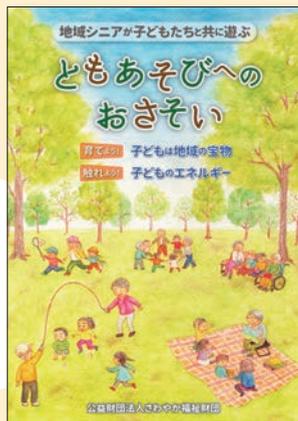


「どう遊ぶ？」QA

ともあそびの準備、遊び方、関わり方、言葉かけのポイントから、注意点や保護者との関わりなどをQ&A方式で分かりやすく解説しています。

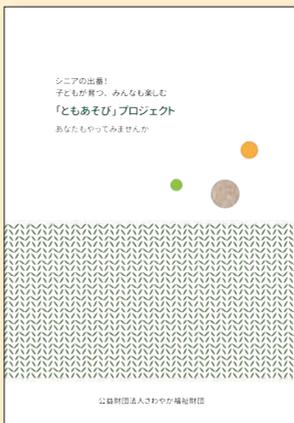
地域シニアが
子どもたちと共に遊ぶ
ともあそびへの
おさそい

ともあそびの種類や始め方などを紹介しています。



シニアの出番！
子どもが育つ、
みんなも楽しむ
「ともあそび」
プロジェクト

あなたもやってみませんか
ともあそびプロジェクトの
提言書です。今、地域でともあそびを広げる意義、子どもたちの成長などについて解説しています。



※当財団 HP トップページ→「ライブラリー」→「各種広報ツール」からダウンロードできます。

◎ お問い合わせは当財団まで ◎

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp